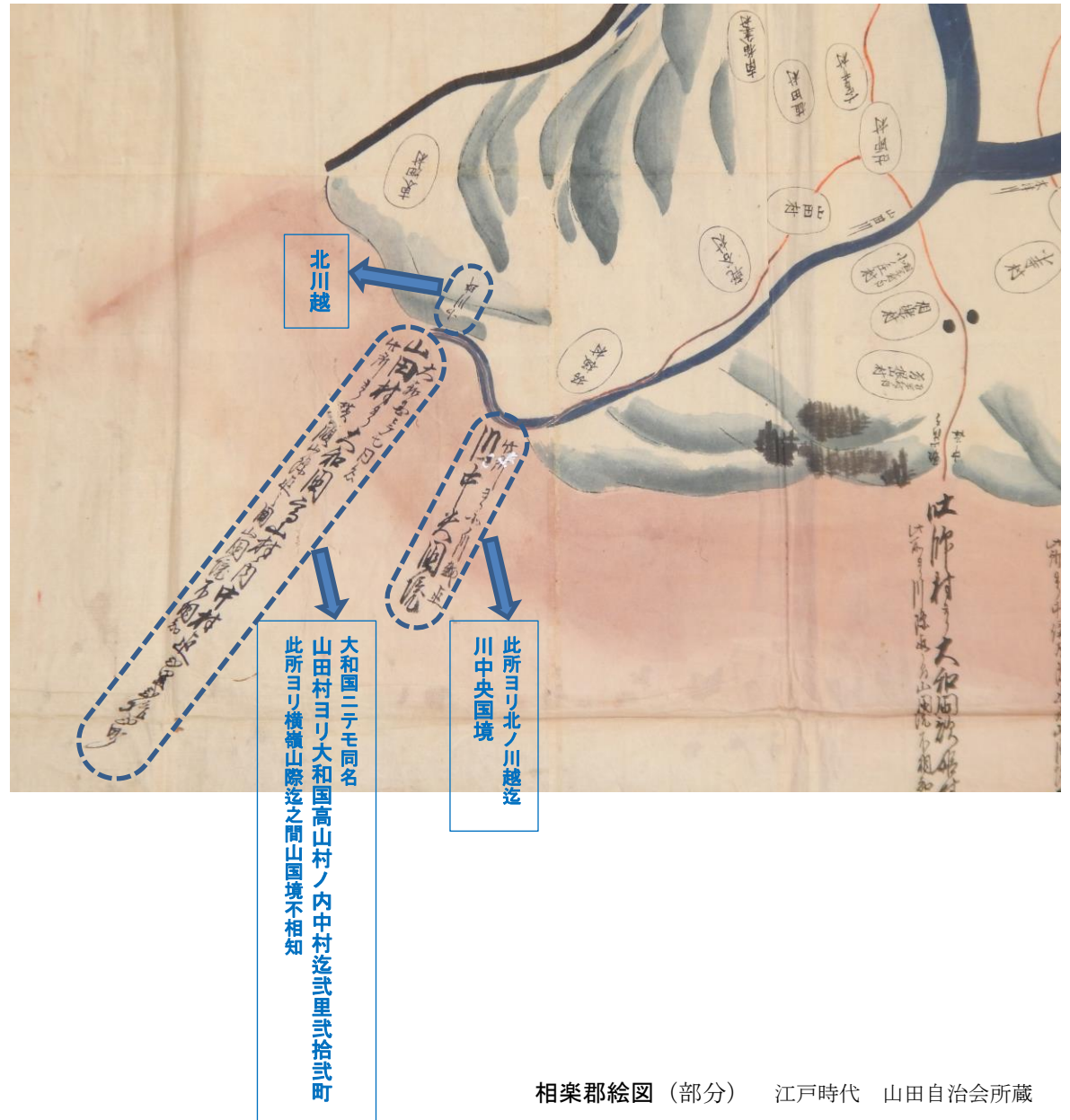




相楽郡絵図（部分） 江戸時代 山田自治会所蔵

いっぽう、相楽郡絵図（写真右。山田自治会所蔵）では、乾谷―柘榴間は山田川沿いを通り、山田・権谷両川の合流地点から権谷川を北上し、「高山村ノ内中村」（生駒市）に至る道筋を「北川越」としています。相楽郡絵図は、江戸幕府が作成した「国絵図」の写の一系統と考えられます。江戸幕府は、山城・大和などの国ごとに「国絵図」を四度作成しました。山城国の場合、慶長（一五九六～一六一五）の国絵図は未発見ですが、正保（一六四四～四八）・元禄（一六八八～一七〇四）・天保（一八三〇～四四）の国絵図が残されています（正保の写は宇治市歴史資料館、元禄の写・天保の原本は国立公文書館の所蔵）。正保の山城国絵図には、「北川越」の記載はありませんが、元禄と天保の山城国絵図および大和国絵図（国立公文書館所蔵）には、それぞれ「北川越」が記入されています。その経路や記事は相楽郡絵図とほぼ同じです。

以上のことから、江戸時代の伊賀街道のうち乾谷から柘榴までの区間は、集落北側の山間部を通る道筋と、山田川北岸を通る道筋という二つの経路があったことが分かります。この二つの経路については、時期によって経路に変化があったのか、あるいは同時に併用されていたのか、明確ではありません。この点は、柘榴から大和国に抜ける道筋（高山または鹿畑）の問題と合わせて、今後の調査・研究が望まれます。



柘榴の寺院



乾谷の寺院

謎のお寺

山田乾谷柘榴三ヶ村絵図 (No. 8) には、たくさんの寺が描かれています。

江戸時代には多くの寺がありましたが、今では廃寺となった寺も少なくありません。廃寺の多くは明治時代に整理・統合されたものですが、江戸時代に廃寺となった場合、記録も残らず痕跡を止めていない寺もあるようです。

この絵図にも詳細が不明な寺が描かれています。これらの寺について言い伝えなどをご存じの方がいましたら、お聞かせください。



山田の寺院

十三重塔をめぐるミステリー

山田の普賢院の近くに十三重塔らしき石塔が描かれています。現在、新殿神社境内に、室町時代の延徳 3 (1491) 年の銘がある十三重塔 (国指定重要文化財、写真右) が安置されていますが、昔は別の場所にあったのでしょうか？

それとも絵図中の石塔は別物でしょうか？

江戸中期の宝暦 3 (1753) 年の新殿神社の境内図には、現在地に「石ノ塔」(十三重塔) があったことが記されていますから (『精華町史』史料篇Ⅱ、299 頁)、この絵図はそれ以前の古い絵図なのでしょうか？

以上のように、この絵図にはさまざまな「謎」が描かれています。今後の解明が望まれます。



発掘調査で見つかった山田川洪水の痕跡

平成二十六（二〇一四）年度、国道一六三号線の乾谷交差点（歩道橋）の北西（旧山田荘小学校跡地）に位置する乾谷遺跡の発掘調査が実施されました。江戸初期の水田跡が発見され、その上層には山田川の洪水によって流入した大量の砂が堆積していました。

このような山田川の水害の影響によって、伊賀街道が川沿いではなく山間部を経由した可能性も考えられます。

なお、水田面には、人や偶蹄目（牛などの動物）と思われる足痕が残されていました。

〔参考文献〕『京都府遺跡調査報告集』第一六五冊

（京都府埋蔵文化財調査研究センター、二〇一六年）





(A)



(B)

No. 9 (A)
No. 10 (B)

山田村絵図 やまだむらえず

江戸時代

(A) 個人蔵

(B) 山田自治会所蔵

江戸後期の作成と考えられる山田村
(現在の大字山田。狭義の山田村)の二
枚の絵図。

よく似た絵図ですが、(B)ではところ
どころ黒く塗りつぶした区画があります。
黒い区画は、禁裏御料(皇室領)の田畑
を示しています。

宝永二(一七〇五)年以降、山田村は
旗本大岡氏と禁裏の二領主による支配を
受けますが、村内の田畑は一筆ごとにい
ずれかの所領に振り分けられ、入り組ん
だ状態となっていました。

すなわち、(B)の村絵図の場合、黒い
区画が禁裏御料の田畑、黄色の区画が大
岡氏領の田畑を表しています。

一方、(A)の村絵図では、領主に関係
なくすべての田畑が黄色で示されていま
す。

なお、(A)の山田村絵図は、江戸時代
に旗本大岡氏領の庄屋を勤めた家に伝わ
ったものですが、ほぼ同様の山田村絵図
が、旗本大岡氏領の在地代官を勤めた家
にも残されています。この絵図の写真と
読み取り図は、『せいか歴史物語 デジタ
ル版』の近世3(五〇頁)に掲載されて
います。